Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

県庁に金子長崎県知事を表敬訪問

『なしむ』第11号

Report　チェルノブイリ・カザフ関連医師の研修受け入れ
カザフスタン派遣報告
People　平成14年度研修者たちの研修感想
Works　NASHIM創立10周年記念特別講演「永井隆博士と原爆」
公開セミナー「測ってみよう放射線」
Korea Report　韓国医師等受け入れ事業
Infomation　外国人による翻訳出版

Vol.11
2002 AUTUMN
発　行／平成14年 10月 31日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570　長崎市江戸町2-13
(長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内)
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037

Report

チェルノブイリ・カザフ関連医師の研修受け入れ

ヒバクシャ医療を学ぶため、ベラルーシ、ロシア、ウクライナ、カザフスタンの4ヵ国から6人の医師等が7月16日来崎。8月21日まで1ケ月余りにわたって、チェルノブイリ国際医療協力事業を活発に行っている長崎大学医学部を中心に、財団法人放射線影響研究所や日赤長崎原爆病院、長崎市原爆被爆者健康管理センターなどNASHIMを構成する各機関で研修を受けました。

ヒバクシャをめぐる総合施策を

研修はまず、共通カリキュラムとして長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設(原研)で各先生方から4日間にわたって講義を受講した後、病理学や放射線科などそれぞれの専門分野に分かれて研修を行いました。
また、被爆者が多数入所している「恵の丘長崎原爆ホーム」を訪問し、診察室やリハビリルームなどを見学した後、被爆者2人から原爆投下当時の話を直接聞きました。医師たちの中には当時の悲惨な状況を聞いて、目頭を押さえる人もいました。

研修の間には、長崎原爆資料館や九州電力玄海原子力発電所を見学したり平和公園での平和祈念式典に参列したりして、長崎原爆の実相などについての認識を深めました。

被爆地・長崎での研修を終えて、研修者一同が口々に話していたのは、日本の被爆者はたいへん手厚く保護されている、自分達の国のよい手本である、ということでした。医療費や手当の支給、健康診断、養護ホームの設置など格段の違いがあり、ヒバクシャ医療技術の向上だけでなく、ヒバクシャをめぐる総合的な援護対策の必要性を認識していただいた研修でもありました。

放射線影響研究所で研修中
後姿は、バートンG.ベネット理事長

People

平成14年度　研修者たちの研修後の感想

ドミトリー・アバクーシン

(ロシア連邦／ロシア放射線医学研究所 上級研究員／専門:免疫学)

日本の先生方にはいろいろご指導いただき、たいへん感謝しております。最新の医療機器が整っている研究所で研究することができました。日本での研修の成果を今後の研究に生かしていきたいと思います。日本の先生方以外に、一緒に研修を受けたウクライナ・ベラルーシ・カザフスタンのドクター達との間で、今後の協力ができればと思います。国家や民族に関係なく、我々ドクターの目的は一つです。それは「人間の健康」を守ることです。
日本における被爆者や高齢者に対する医療保障やその他の特別な配慮にとても感動しました。私の国でも障害者や高齢者に対して、同じように国家が配慮することを望みます。

ナターリァ・オルコヴィッチ

(ウクライナ／ウクライナ小児病院 遺伝医学部門主任／専門:遺伝子診断)

今回の研修はたいへんすばらしくプログラムされていました。医学の最新テクノロジーに触れることができ、自分の専門レベルを上げることができました。特に最初の1週間に受講した一連の講義はたいへん興味深く、役に立つ情報でとてもためになりました。講義して下さった先生方、たいへんありがとうございました。特に原研の先生方には大変お世話になりました。山下先生と高村先生の仕事に対する熱心さと献身が、放射線医学分野でのウクライナ・日本間の協力の成果を上げている基本になっていることを目の当たりにしました。
今回の研修に参加させていただいたNASHIMには心から感謝しております。

マリアンナ・ザグロフスカヤ

（カザフスタン共和国／第二次世界大戦記念病院 医師／専門：放射線科）

今回、この研修を企画・運営して下さったNASHIMの皆様に心から感謝したいと思います。被爆者の健康状態や生活について、また豊かでとても美しい日本、友好的で開放的な、しかもお客を大切にする日本人について多くを知ることができました。

日本政府の被爆者や国民の健康に対する配慮にはとても感動しました。もちろん、医療技術の高さや専門家養成のレベルにも感動を覚えました。関係機関の諸先生方にはすばらしい講義をしていただき、感謝いたします。また、長崎大学医学部附属病院の放射線科の専門家の方々には特にご指導いただき、本当にありがとうございました。長崎で得たすべての知識と暖かい歓迎や配慮は、私にはとてもためになりました。

オレッグ・ゴルベフ

（ベラルーシ共和国／ゴメリ医科大学 病理学教室主任／専門：病理学）

私はこの研修で、日本の保健制度、被爆者のための医療援助システム、長崎大学医学部の学生教育プログラムなどについて、大変多くを学びました。日本での被爆者への援助や配慮に関しては驚くべきものがあります。日本では被爆者の方々を尊敬して大切にしていると思いました。そして私も被爆者と会ってみて同じ気持ちを持ちました。もう一つわかったのは、広島と長崎に対する原爆投下はいかに戦争とはいえ、計画的な犯罪実験だったということです。

私の担当しているゴメリ市での乳ガンの形態発生の研究プロジェクトに関して山下先生には的確な助言をしていただくとともに、関根先生のお陰でゴメリ市にすばらしい顕微鏡用プレパラートのセットをもって帰ることができました。

お世話になったすべての皆様に、日本に滞在することができたことと、自分の専門的なレベルを上げることができたことを心から感謝いたします。

スベトラーナ・アニスチェンコ

（ベラルーシ共和国／ベラルーシ医科大学 病理学教室助教授／専門：病理学）

日本での被爆者に対する医療支援は私たちのお手本となるものです。日赤長崎原爆病院、恵の丘長崎原爆ホーム、放射線影響研究所などへの訪問でそれがよくわかりました。各先生方の「人体への放射能の影響」に関する医学的・社会的な面から見た一連の講義内容は、とても興味深く、内容の深いものでした。また、原研での最新の研究、方法、新技術、医療機器など多くを学び、情報収集することができました。

ベラルーシと日本両国民間の相互理解、友好と平和に対する日本の努力には深く感動するとともに、原爆資料館の見学や平和祈念式典への参加は、とても強い印象を残しました。今回の研修内容は様々な内容が上手く組み合わされており、とてもすばらしいものでした。

また、ご多忙であるにもかかわらず、長崎県知事、長崎市長が私たち研修者とお会いになって下さり、とても光栄でした。また、報道関係者の方々にも私たちの研修をニュースとして取り上げていただき、とても嬉しく思いました。

グルフィラ・エンセバエバ

（カザフスタン共和国／ポリクリニック第3病院　院長 ／専門：皮膚科・医療経営学）

この研修は、私個人や私の国カザフスタンの人々にとって大変役に立つと思います。なぜなら、日本では被爆者に対する援助の蓄積が豊かだからです。

研修の内容はとてもすばらしいものでした。私たちは理論のみでなく、実習の面でも多くのものを得ることができました。

多くの先生方の興味深い、内容のある講義はとてもよかったです。また、長崎市の個人クリニックを訪問することができ、院長先生やその他の先生とも知り合うことができました。

私たちに日本での研修の機会を与えて下さったNASHIMと、暖かくもてなして下さった長崎市民の皆様に深く感謝申し上げます。

Report

カザフスタン派遣報告

NASHIMでは、受け入れた研修者のフォローアップ事業として専門家等をチェルノブイリ原発事故周辺国やカザフスタン共和国へ派遣していますが、今年は長崎大学留学生課の青木一郎専門員と、長崎県原爆被爆者対策課の原田正明総括課長補佐の2名をカザフスタン共和国へ派遣しました。

カザフスタン共和国 医師等派遣事業に参加して

長崎県原爆被爆者対策課
原田　正明

平成14年8月27日(火)から9月3日(火)までの間、実施された「平成14年度カザフスタン共和国医師等派遣事業」に参加させていただきました。

NASHIMでは、医師等医療関係者の招聘研修事業を実施していますが、カザフスタン共和国からも毎年何名かの受け入れを実施しており、対象国の現状の把握と関係機関へのNASHIM活動の周知及び意見交換がその主な目的です。

セミパラチンスクへ

日常の業務に追われる中、十分な準備もできないまま、出発の日を迎えました。同行する長崎大学医学部の関根一郎教授、青木一郎専門員らとともに、韓国の仁川経由で7時間のフライトの後、深夜にアルマティ市に到着、市内のホテルで仮眠を取って国内便を乗り継ぎ、ようやく目的地のセミパラ空港に着いたのは、8月28日の午後2時でした。

最初の訪問先であるセミパラチンスク診断センターに着くとすぐに先行して現地入りしていた長崎大学の山下俊一教授が主催されている医療関係者向けセミナーに呼ばれました。

山下教授は、現地医療関係者の被曝医療の知識や技術の向上に心を砕かれ、息の長い活動を続けておられますが、その活動の一端を見せていただくことができました。私も50人近い出席者の前で、NASHIMの活動について発表する機会を与えていただきました。

翌日は関根教授に同行し、現地の医療の中核であるセミパラチンスク国立医科アカデミー(医科大学)やセミパラチンスク市保健局を訪問、被曝医療や国際協力について意見交換を行いました。

閉鎖記念式典に出席

午後は、関根教授と別れ、青木専門員と私は、セミパラチンスク核実験場の閉鎖記念式典に出席しました。この日がちょうど核実験場が閉鎖された記念日に当り、毎年、記念式典が開催されているのですが、NASHIM関係者として挨拶及び献花を行いました。遠い日本国の長崎から来たということで、出席者からたいへんな歓迎を受け、現地のお年寄りたちが一生懸命話し掛けてくるのに感激しました。

閉鎖記念式典終了後、現地の被曝者達と記念撮影

滞在中、私たちがお世話になったセミパラチンスク・コンサルタント診断センターは、JICAや長崎大学医学部の現地での活動拠点となっており、JICAの土井先生や大宮さん、長崎大学の先生方、現地のスタッフが席を温める間もないほど、忙しく活動されていたのが今も強く印象に残っています。

アルマティ市内の美しいキリスト教の教会

МОЛЧАНИЕ РОЖДАЕТ СЛЕЗЫ

ГЕНЕРАЛЬНЫЙ КООРДИНАТОР JICA В СЕМИПАЛАТИНСКЕ

セミパラチンスク核実験場閉鎖記念式典に、参列したことを報ずる現地の新聞

リーダーとしての人材を

セミパラチンスク・コンサルタント診断センターはたいへん立派な施設で、JICAの支援等により医療設備も充実しているようです。診察室も広くとってあり、「診察室は男女別、大人・子供別にありますよ。」との説明を聞くなど、日本より充実している面もあるようです。所長のチュビリョフ・ビクトル氏からは、「帰国後に医療チームのリーダーとしてスタッフを指導できる人材をとの観点から日本への研修生の人選を行っている。」とのお話を聞きました。

このほか、アルマティ市の心臓と内臓研究所のアブラエフ・ジャンゲットハン副所長や日本大使館の早水書記官にお目にかかってお話をお聞きすることができました。

カザフの食卓

思い出に残っているのは、マイラ・エスペンベトワ教授御夫妻が私たちを自宅に招いて、手作りの料理でもてなしてくださったことです。マイラ教授が「お招きしたのはカザフ人の生活を見ていただきたかったからです。」と挨拶されましたが、口では簡単に表現できないほどの山ほどのごちそうで歓迎していただきました。食事の途中に休憩時間があるほど、カザフ人はよく食べるのだそうですが、実際、私などは出された料理の3分の1も食べることができず、本当に申し訳なく思いました。マイラ先生ありがとうございました。

訪問前に抱いていたイメージとは異なり、アルマティ市もセミパラチンスク市も緑の多い美しい街でした。

人口の5割を占めるカザフ系の人たちは日本人と見分けがつきませんので親しみが持てます。多民族国家ですが国民は仲良く、国情は安定しているようです。核実験による被曝の歴史を乗り越えて今後の発展が期待されます。

以上、短期間に多くの医療機関を回って責任者のお話をお聞きすることができ、たいへん有意義な活動をさせていただきました。行程のコーディネートをしてくださった山下教授に感謝いたします。JICAの土井先生、大宮さん、現地スタッフの皆さん、ありがとうございました。ご活躍をお祈りします。

ダフストリェーチ！

（また、あいましょう）

JICAプロジェクト「セミパラチンスク地域医療改善計画」への参加

長崎大学原研医療分子部門　濱田亜衣子

カザフスタン共和国旧セミパラチンスク州では、旧ソビエト連邦時代に500回近い核実験が繰り返されました。周辺住民は、長年何も知らされないまま放射能降下物の影響を受け、その後遺症に苦しんでいます。すなわち海外のヒバクシャです。日本政府は国際協力事業団（JICA）を通じて、長崎大学などの力でこの放射能汚染地域の医療改善計画を立案し、2000年夏から現地で支援活動を展開しています。私自身は、今年の5月から放射線障害によって引き起こされるがん（甲状腺がん、乳腺がん、肺がん、白血病を含む血液疾患）に対する検診活動に従事しました。供与された検診用トラックにはレントゲン撮影機材や超音波診断装置などが搭載され、旧核実験場周辺の広大な草原に散在する人口1,000人から5,000人程度の約20の村落を巡回しながらの検診活動でした。

セミパラチンスク市の診断センターのスタッフらと一緒に、検診会場となる町の病院や小学校に泊り込みで検診を行い、がんの早期発見に努めました。多くの住民が集まり、多い日には一日に約100人の診察を行いました。夏の草原のシルクロードは、昔ジンギス汗らが歴史を築いた地でもあります。夜は満天の星空で、本当に360度天の川を見ることができます。素朴な遊牧民とのユルタでの交流や、ワイルドな自然での生活では、日本では決して味わうことのできない心の豊かさを感じることができました。一緒に働いた細胞診の土井先生や林調整官は、もうシルバーボランティアのお年ですが、大変お元気で現地の人材育成に貢献しておられます。巡回検診だけでなく、種々の技術移転が試みられていますが、長崎からJICAを通じた医療支援活動が地域住民の健康増進に少しでも貢献し、その結果、放射線被ばくに対する健康への不安を軽減できればと念願せざるを得ません。

世界には自然環境や社会環境など多種多様な外的因子が人間を取り囲んでいます。国境を超えてどの社会においても健康を願う人々の気持ちは同じであることを実感できた3ケ月間でした。

がん検診を行うスタッフ

検診対象となったカラウル村

People

カザフスタンから管理職員来崎

NASHIM 放射線疫学会議に出席

カザフスタン共和国から、放射線医学環境研究所のアブサリコフ・カズベック・ネグマトビッチ所長が12月17日来崎されました。アブサリコフ所長は、ナシムの新規事業として今年度から始まった「チェルノブイリ・カザフスタン管理職員研修受け入れ事業」でナシムが招聘したものです。12月24日まで長崎に滞在して、財団法人放射線影響研究所や日赤長崎原爆病院、長崎大学医学部附属病院を視察したり、兼松隆之長崎大学医学部長や塚原太郎長崎県福祉保健部長を訪問して意見交換を行いました。

また、ナシムが主催する放射線疫学会議に出席して、セミパラチンスク地区での放射線ヒバクシャたちの健康状態などについて発表を行いました。

カザフスタン共和国放射線医学環境研究所は、旧ソ連が1949年以来450回以上の核実験を行ってきたセミパラチンスク核実験場から約150キロに位置しており、1991年に改組、新設された研究所で、セミパラチンスク核実験場周辺の被ばく線量評価や健康影響の研究を活発に行っています。前身は旧ソ連が設置した、カザフスタン風土病研究所で、後を引き継いだ放射線医学環境研究所は現在も当時のの検診データを保管しています。

12月18日同研究所は、これまで遺伝子解析などの共同研究を行ってきた長崎大学と学術交流協定を締結しました。アブサリコフ所長は「放射能の人体影響研究で世界をリードする長崎大学との協定は大きな意味を持つ」と語っています。

(財)放射線影響研究所を視察

長崎大学医学部附属病院を視察

Kazakhstan

放射線医療科学国際コンソーシアム 第1回長崎シンポジウムに参加

文部科学省の「21世紀COEプログラム」に昨年選定された長崎大学の、「放射線医療科学国際コンソーシアム」の第1回長崎シンポジウムが2月21日、22日の2日間長崎大学医学部ポンペ会館において開催され、ナシムから井石哲哉会長が出席しました。

21世紀COEプログラムは先駆的な研究を実践する大学に科学研究費を重点配分し、世界最高レベルの研究拠点づくりを進める国家プロジェクトです。長崎大学では昨年、世界各地の研究機関などと連携し、低線量放射線の人体影響など放射線医療科学の世界拠点化を進める「放射線医療科学国際コンソーシアム」事業を計画しています。

長崎大学医学部ポンペ会館にて

レセプションで挨拶する井石哲哉NASHIM会長

第1回長崎シンポジウムには国内外から110人の専門家が参加し、初日は朝長万左男原爆後障害医療研究施設長からコンソーシアム事業の内容などの説明がありました。また、チェルノブイリの甲状腺がんなどについての基調講演もありました。

夜のレセプションでは、コンソーシアム事業に協力する団体として、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の井石哲哉会長から「今回のシンポジウムを契機として長崎大学が提唱する『放射線医療科学国際コンソーシアム』が1日も早く設置され、人類の健康と平和に大いに貢献されるよう望んでいます」と挨拶がありました。

Symposium

Information

外国人による翻訳出版のご紹介

『この子を残して』　　訳者　韓国　成 浩慶氏

成浩慶氏は1929年生まれで現在73歳。1930年から1946年まで日本の名古屋市に居住しその間、幾多の空襲、戦災を身をもって体験されている。戦後、韓国に帰国し、農畜産業に従事。1992年にカトリックに帰依し、その後居住地の教会の信徒会長に選ばれ、現在に至っている。

2000年8月、大邱大教区長や神父たちとともに長崎カトリック聖地巡礼の旅に参加。出発直前、長崎市のホームページで永井隆博士や著書を知り、永井隆記念館や如己堂を訪れた。記念館で永井博士に感銘を受け、「ロザリオの鎖」、「如己堂随筆」、「この子を残して」の3冊を購入。

『この子を残して』の表紙

帰国後、何度も繰り返し読んで、カトリック信者として深く心を打たれたそうである。この感激を自分だけでなく、もっと多くの韓国の信者たちに分けてあげたいと思い立ち、その年の秋から「この子を残して」を翻訳し始め、今年6月、自費出版した。 成浩慶氏は「永井隆博士の文章を翻訳しながら、私のイエス様に対する信仰心がますます深まり、心が平和的な気分になりました。永井博士に感謝しております。この本を読む韓国の人たちが、博士の崇高な人間愛の精神を少しでも手本にしてくれれば、訳者としてたいへん幸いに思います。」と語っている。

『長崎の鐘』
訳者　バングラデシュ　マハブラ・ラーマン氏

バングラデシュの弁護士ラーマン氏は、子供の頃、医師の父から原爆の話を聞いて以来、原爆に強い関心を持ち続けた。1997年、31才の時、首都ダッカの日本大使館で「長崎の鐘」英語版に出会い、そこにつづられた永井博士の姿に深い感銘を受け、ベンガル語版の出版を思い立った。まもなく翻訳を完成したが出版資金が足りず、来日して長崎、広島で協力を呼びかけていた。両市民から寄付金が集まり、今年2,650冊を印刷。バングラデシュの学校の他、来日して長崎市の原爆資料館や広島市の平和記念資料館などに寄贈した。

ラーマン氏によると、ベンガル語は世界の3.32％にあたる2億700万人の人々が話す言葉だそうで、資金が足りず2,650冊しか出版できなかったのを残念がっている。ラーマン氏はバングラデシュの医師や弁護士、大学教授らで2000年1月に設立した「広島・長崎連帯協議会」の活動の一環として、バングラデシュの全小学校93,992校に簡単な言葉に直した『長崎の鐘』を贈る運動に取り組んでおり、各方面に協力を呼びかけている。

『長崎の鐘』の表紙

編集後記

戦後我が国でベストセラーとなった永井隆博士の代表的な著書が、今日でも国境を越えて世界のいろんな国で翻訳され、読者に深い感動を与えています。今年翻訳出版された韓国の成浩慶さんやバングラデシュのマハブラ・ラーマンさんには、その労苦に対し心からねぎらいと感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。

今回、写真はすべてカラーにしたのでずいぶん見やすく、きれいになったと思います。次号以降も続けていきたいと思っています。　（草場）

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

第11号
発行　平成14年 10月 31日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
(NASHIM)
TEL 095(823)4278
FAX 095(820)3037
http://www.nashim.org/
E-Mail info@nashim.org

Nagasaki
Association
for
Hibakushas'
Medical Care